2026年1月18日
「はじめてのキリスト教」説教要約

アブラムは主を信じた

（創世記15・1～6）

一、人（アダム）の特異性

キリスト教で「信じる」とは、どういうことなのでしょうか。私は、「信じる」とは人（アダム）に授けられた神のかたちかと考えています。犬や猫、そして家畜は、自分に良くしてくれる主人、ないしは飼い主を慕うことでありましょう。ですが、動物が人（アダム）と同じように「信じる」ことができるかと言えば、できないと思います。人（アダム）は特別な存在として、創造されたからです。神からの啓示の書である創世記1章26節、27節に、こうあります。**〈神は仰せられた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された〉**と。では、信じることについて、人（アダム）と動物とは、どのように異なるのでしょうか。ひと言で言うなら、人は永遠を意識して信じることができます。伝道者の書3章11節にあります。**〈神はまた、人の心に永遠を与えられた。しかし人は、神が行うみわざの始まりから終わりまでを見極めることができない〉**と。私共は、意識・無意識を問わず、永遠を思いつつ生きています。動物も、主人の帰りを待って生きていることでありましょう。しかし人間とは次元が異なります。人間は、今置かれている環境が苦しくても、将来に希望を思い描くことができるなら、耐えることができます。同時に、今置かれている状況が何不自由なく思われる生活であったとしても、将来に希望を見いだせないなら、自暴自棄になったり、この世だけを求める人間になったりすることでありましょう。

二、アブラムは主を信じた

創世記に登場するアブラムは、主である神が、アブラムと彼の子孫から神の祝福を現そうと、選ばれた器でした。そういうアブラム自身は、多神教の地カルデアのウルで生まれ育ちました。ところが、ウルから出て、主が指し示される地カナンに向かって旅立ちました。創世記12章2節、3節にあります。**〈わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される〉**と。そのためには、アブラムから出る子孫が必要です。しかし、アブラムと妻サライの間には子供が生まれませんでした。年月が経ち、しもべや財産は増えて行ったものの、世継ぎが生まれません。アブラムには恐れがありました。こうして、きょうのテキストにつながります。15章1節です。**〈15・1〉** 主が語られたことばは、主がアブラムを覚えておられ、アブラムに語られた約束を果たす、というものでした。しかしアブラムは半信半疑です。2節です。**〈15・2〉** 自分に語られた主の約束が反故（ほご）になるのではないかと恐れたアブラムは、忠実なしもべエリエゼルから生まれる子が跡継ぎになり、主の約束が果たされるかと、おそらく神に不平を思いつつ語ったと思われます。当時、主人に跡継ぎが生まれなかった場合は、しもべが間接的な相続人になることが認められていました。ゆえにアブラムは語りました。3節です。**〈15・3〉** もちろんアブラムは、そのことを願っていません。すると主は、はっきり語られました。4節です。**〈15・4〉** 主は、**「その者があなたの跡を継いではならない。ただ、あなた自身から生まれ出てくる者が、あなたの跡を継がなければならない」**と語られました。これはアブラムにとって、「主の御約束に信頼するなら、こうなる」という保証のことばとして響いたに違いありません。

アブラムはどのように応答したでしょうか。アブラムが応答する前に、主はもう一つの行動を取られました。それが、5節です。**〈15・5〉** すると、アブラムは主を信じて応答しました。6節です。**〈15・6〉** ここで語られている**〈アブラムは主を信じた〉**とは、人（アダム）だけができる決断であり、神への応答です。このところだけを読むなら、何気無い出来事のようにも読まれるかもしれません。ですが、**〈アブラムは主を信じた〉**は、後に、私たちがキリストを信じる信仰と同じであると語られています。そう、解き明かしたのは、使徒パウロです。最後にその箇所を見てまいりましょう。

三、パウロとアブラハム

パウロは、神が遣わされた救い主イエス・キリストを信じる信仰が、アブラハムが主を信じたことと重なると、ローマ書の中で語っています。ローマ書、4章2節、3節です。**〈もしアブラハムが行いによって義と認められたのであれば、彼は誇ることができます。しかし、神の御前ではそうではありません。聖書は何と言っていますか。「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」とあります〉**と。私共の前には、二つの道があります。一つは、イエス・キリストを信じて罪の赦しにあずかる道です。もう一つは、信じない道です。信じるか信じないかは、私共一人びとりの選択にかかっています。